
福 井 県 医 師 会

だまり

第557号 平成19年(2007)11月



表紙写真説明：六つの瞳

マチュピチュ行きの列車が通るウルバンバの町（ペルー）で出会った女の子。三姉妹でしょうか。きれいに編んだ髪の毛とキラキラと輝く瞳が印象的でした。

鯖江市 今野 利男

外科医と外科医会について

福井県外科医会会長 松 下 利 雄



この度、今年の6月福井県外科医会総会において会長を拝命しました松下利雄でございます。昨今の外科医の置かれている状況について、私見を述べて、外科医会の活動方針にしたいと思っております。

まず外科医のなり手が少なくなっているという事実があります。これは、今の時代は若者達が、重労働を伴う、3K（きつい、危険、汚い）と言われる職場を嫌う風潮があります。そのため、外科だけでなく、産科、小児科、麻酔科、ERのような一般救急医なども嫌われています。昔は外科は医師の中でも花形で、特に手塚治虫のブラックジャックに憧れる方も大勢いました。

我々も外科に入りたちは出来るだけ症例を増やすために患者が来るのを待っていたぐらいで、我先に診に行っただけです。兎に角OPになったら嬉しかったものです、若い時ですから夜に呼ばれても平気の平左でした。

外科医は知識も大切ですが、最も大切なことば、メスを持つもの全てに当てはまりますが、職人芸(センスとひらめき)とも考えられるOP技術(テクニク)です。症例を重ねるにつれ自然と手が動くようになり、これがプロという域ですが、そこからはアートになります。それには症例を大事にして、完璧なOPなどない訳ですので、OPの時の反省を寝ながらでもよく考えることです。なぜあそこで血が出たのか、なぜ出血がすぐ止められないのか、なぜ切り口や縫合がゆがむのか、など等。考えて考えて、それから先輩のやり方を参照したり教えを請うのです(これが外科のチームワークのよさ)。教科書や書物をまた見るのです。また失敗談こそ多く学べるので他山の石とすることです。そうして力をつけていくのです。私もよく考えました。そし

て何が起きても動じなくなりました。やっとなんでも対処できてしまう指導医に成長したと考えています。

外科医会は我々の卵の減少を黙視することなく、まず外科の魅力アピールすべく、今年12月1日に福井大の医学生との交流会を初めて企画しました。若手外科医達の話に引き続いて、会長の講演もやります。その他に外科医会の講演会も回数も多くします。他料との合同講演会もします。来年には県民公開講座を企画しています。

一般病院の外科は確かに呼び出しや緊急も多くきつい仕事ですが、命を預かっている仕事にしんどくないことなどありません。だからこそ人々の尊敬を受けるのです。また病院の外科は外傷だけでなく、腹部のOPがメインで、栄養管理を含めた全身管理が必要で、すぐに基本処置が身につけられます。そして災害時や大事故などに要請されたら医療援助も出来ます。海外からの要請にも応えられます。まさしく大勢の傷ついた人を助ける実感が出れます。私は48歳で、国際赤十字委員会の作ったパキスタンの戦傷外科病院で3ヶ月間外科医として激務をこなしてきました。

私の病院の外科は早くから執刀させ(勿論部長級が前立ちで指導)、チームワークの中で楽しく学び、3年で一人前の外科医にさせるのを第一段階の目標にしています。外科はすぐに人を救ったことがわかり、やりがいがあります。どーんと飛び込んできなさいと言いたい。ただ体力も必要ですが、体力は必ずついてきます。こんな風に外科を宣伝したいと思います。残された問題は外科医の労働と賃金の格差で、これから改善していく所存です。